解読

浅田兄弟敵討一件

全

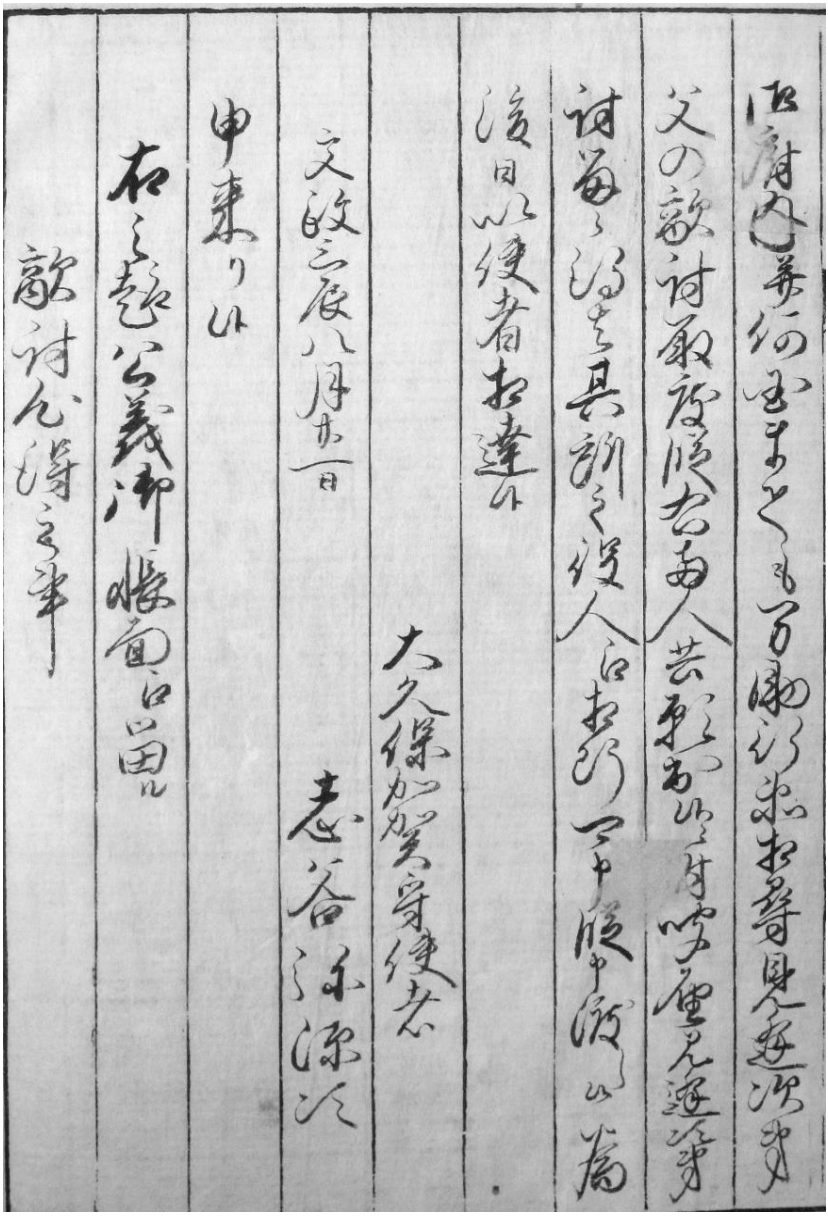
茨城県立図書館
郷土資料整理ボランティアグループ

浅田兄弟敵討一件

一大久保加賀守殿藩士柴足軽浅田弟助と申者去る寅
七月彼九右衛門浅田惟助を殺し其儘逐電仕候
為捕方に成惟助父八深手を負ひ翌日相果申候
於其場相捕吟味申候処金九郎申聞候
之事ハ自宅舎申候而当二月寄捕ひ等為
仕候段等一応今九郎ハ不相申然ル処寄捕
い等しかるに本心ハ之度ハ為捕ふ惟助事
浅田鉄蔵当廿一歳弟門次郎当廿二歳父八自論

浅田兄弟敵討一件

一大久保加賀守改我等足軽成瀬万助と申者　去々寅
七月致乱心　傍輩浅田唯助其外のもの共江手疵
為負候の処　唯助儀ハ深手にて翌日相果　万助儀
於其場取押吟味申付候処　全乱心に相違も無
之事に付　牢舎申付候所　当二月牢抜いたし候間
厳敷尋候へ共　今以行衛不相知申然ル処　牢抜
いたし候上ハ　本心に立戻り候と相察られ候　唯助養子
浅田鉄蔵当辰二十一歳　弟門次郎当辰十二歳領　分ハ勿論



御府内並何国まても万助行衛相尋　見逢次第
父の敵討取度段　右両人共願出候ニ付　聞届見逢次第
討留候得ば其所の役人江相改可申段申渡し候　為
後日以使者相達候

大久保加賀守使者

文政三辰八月二十一日　　志谷弥源次

申来り候

右の趣公義御帳面江留ル

敵討心得の事

一敵討留ニ付其所ニ国元ニ伺ヒ可申事

一江戸御出張ニ付ハ国元ニ伺ヒ可申事

一万助病死之節急度相届ケ可申事

八月廿日

向井彈右衛門組下

浅田鉄蔵

一向井彈右衛門組下浅田鉄蔵中間一件

一　敵討留候ハヾ其所の国主領主江可訴事

一　江戸御曲輪両山抔は可為遠慮其外右に准シ候　場所は憚候て可然候事

一　万助病死の趣　急度相知候ハヾ慥成證拠持立戻り可申事

向井弾右衛門組下

八月二十四日　浅　田　鉄　蔵

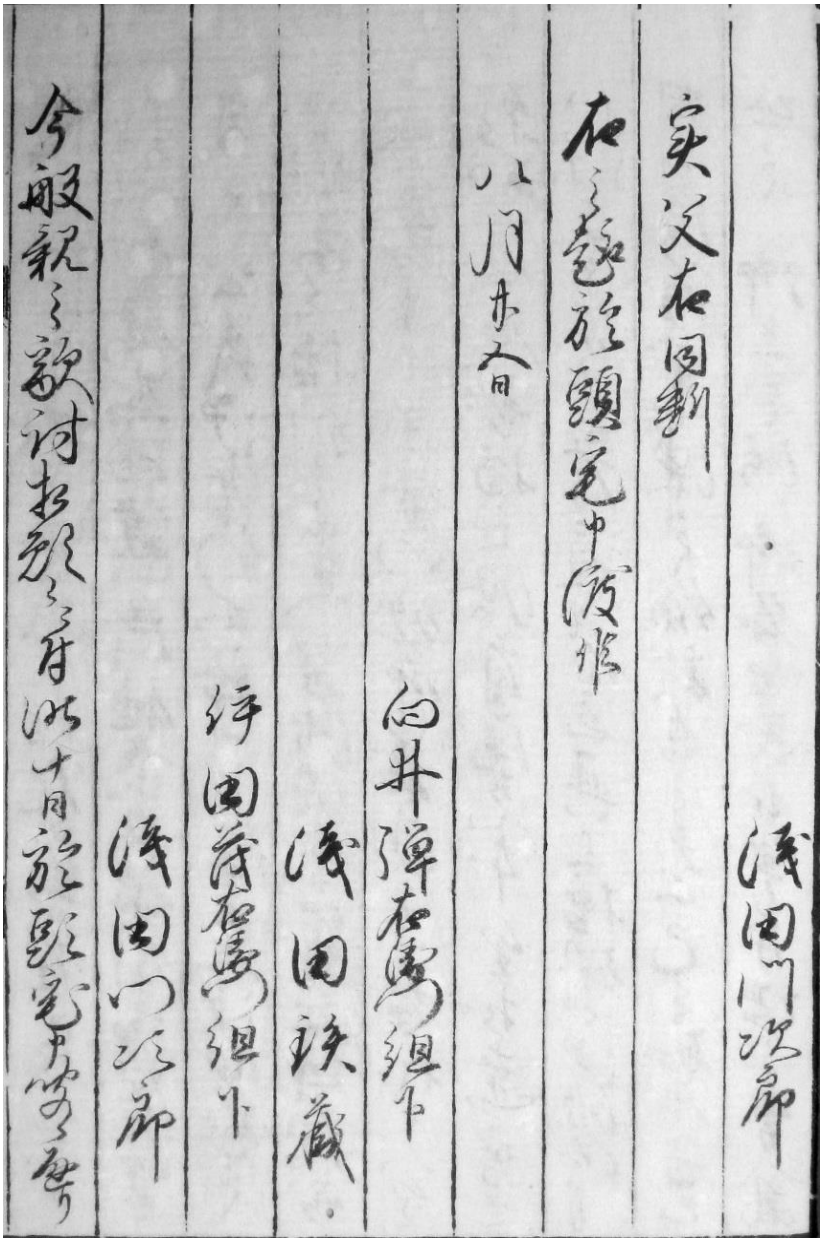
一　向井弾右衛門組下浅田鉄蔵へ申渡す一件

養父唯助敵成瀬万助行衛相尋討果申度　依之

御順却彼之不敵之通中村以後之次第
首尾能討果仕之訳之段人口始終却度捉之通
知計之上八幡宮へ帰参仕御役者江御尾敬被仰付
家内畢逃之却度仕家内之者共之内沙汰仕捕之人
分左之通被安堵之通申上遣候事
金拾両宛　下遣家内之者共逃之仕者
沙入用者之通賞多如左新敷方江弘
紙美濃守次第二被事
伊田茂右衛門組下

御暇相願の所願の通申付候　勝手次第出立可致候
首尾能討果候ハヾ其所の役人江始終相届　掟の通
取計の上ハ帰参可被仰付候間　江戸御屋敷成共向
寄江早速可相届候　家内の者共は御養御扶持三人
分被下置候間　致安堵可遂本望且為御心付
金十両被　下置家内の者是迄の御長家
御入用有之迄御貸被成候　尤親類共方江罷
越義勝手次第可致事

伊田茂右衛門組下



浅田門次郎

実父右同新

右之儀於願宅中殺害

八月朔日

白井弾右衛門組下

浅田秋蔵

仲間茂右衛門組下

浅田門次郎

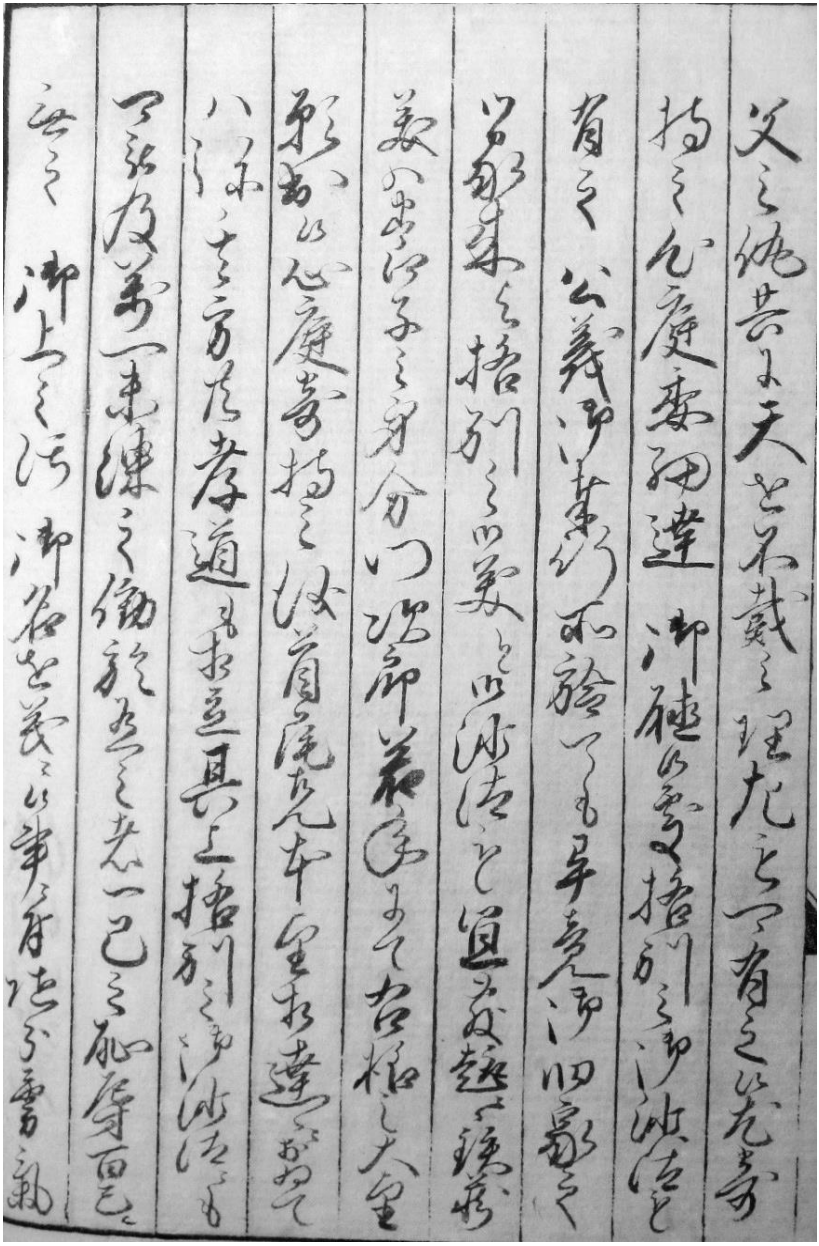
今敵釈之敵討相願之者此十月於願宅中殺害

実父右同断
右の趣於頭宅申渡候
八月二十五日

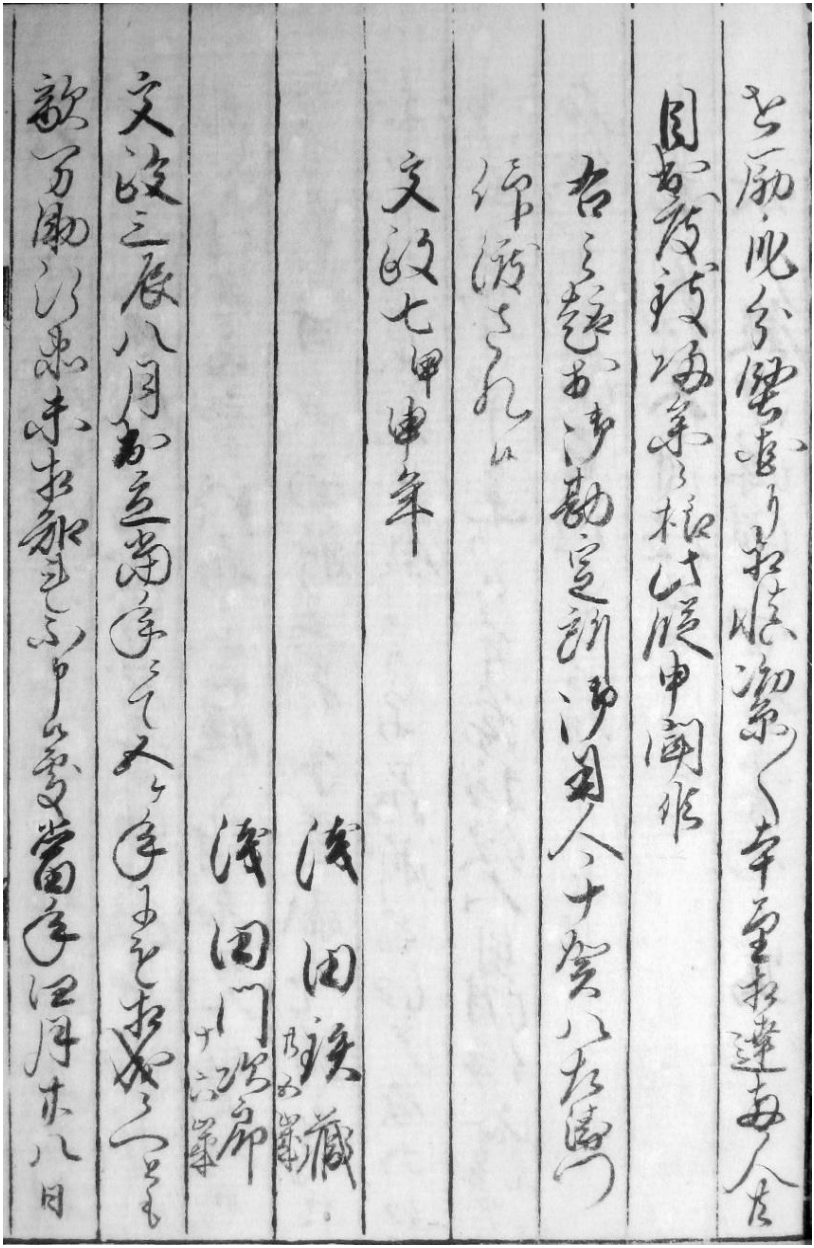
浅田門次郎

向井弾右衛門組下
浅　田　鉄　蔵
伊田茂右衛門組下
浅　田　門次郎

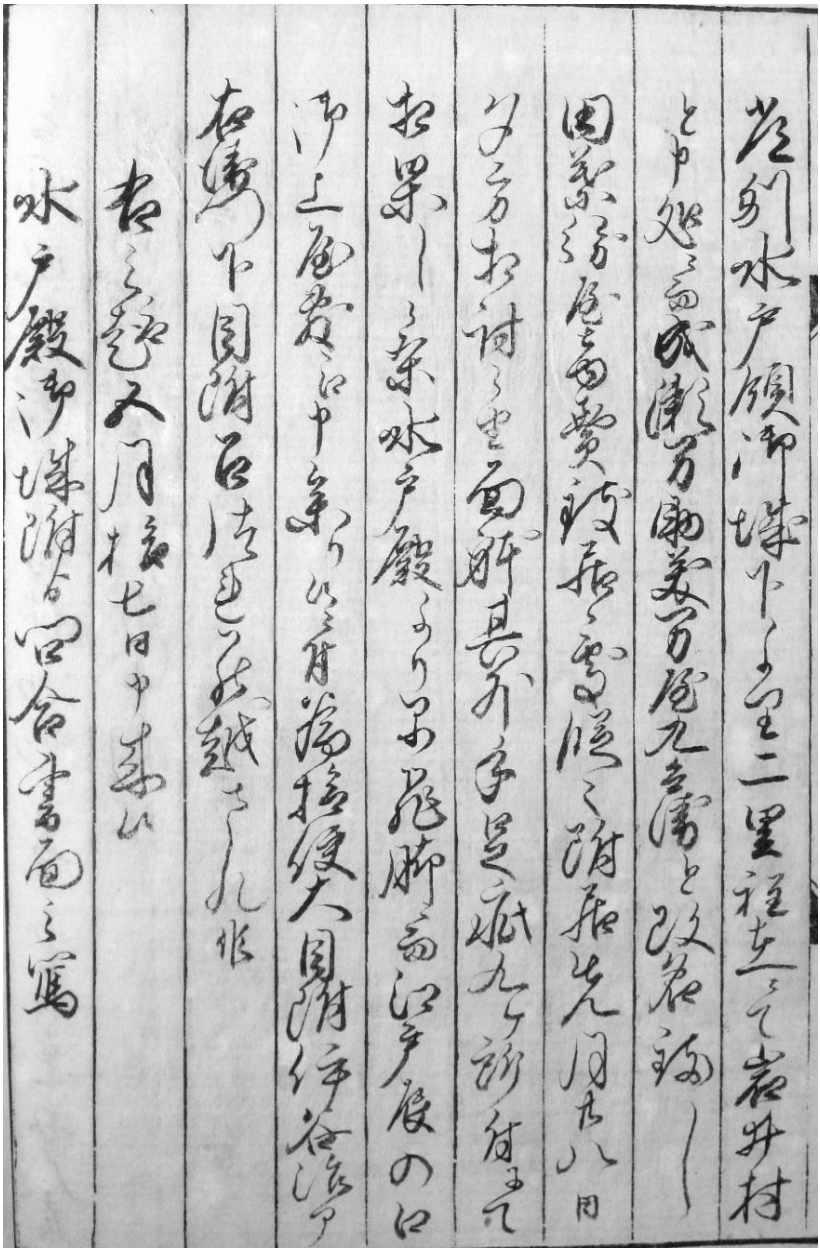
今般親の敵討相願候ニ付　昨十日於頭宅申聞候通り



父の仇共に天不戴の理左も可有之候　尤寄
特の心庭委細達　御聴候処格別の御沙汰も
有之　公儀御奉行所於ても畢竟御旧家の
御家来と格別の御義と御沙汰も宜敷趣ニて鉄蔵
義ハ養子の身分門次郎若年にて　右様の大望
願出候　心庭奇特の儀　首尾克本望相達候ニおいて
ハ弥其方共孝道も相立　其上格別の御沙汰ニも
可被及万一未練の働於有之は一己の恥辱のみニ
無之　御上の汚　御名を義ニ候事ニ付随分勇気



を励身分堅固に相慎潔く本望相達　両人共
目出度致帰参候様　此段申聞
右の趣於御勘定所御用人千賀八左衛門
仰渡され候
文政七甲申年
浅田鉄蔵　二十五歳
浅田門次郎　十六歳
文政三辰八月出立　当年ニて五ヶ年にも相成候へとも
敵万助行衛未相知れ不申候処　当年四月二十八日



常州水戸領御城下より二里程在ニて　岩井村
と申処ニて　成瀬万助義万屋九兵衛と改名致し
田葉粉屋商売致居候処　段々付居先月二十八日
夕方相討候由　面躰其外手足疵九ヶ所付にて
相果し候条　水戸殿より早飛脚ニて江戸辰の口
御上屋敷江申参り候ニ付　為検使大目付伊谷治郎
右衛門下目付召つれ罷越され候

右の趣五月十七日申来候

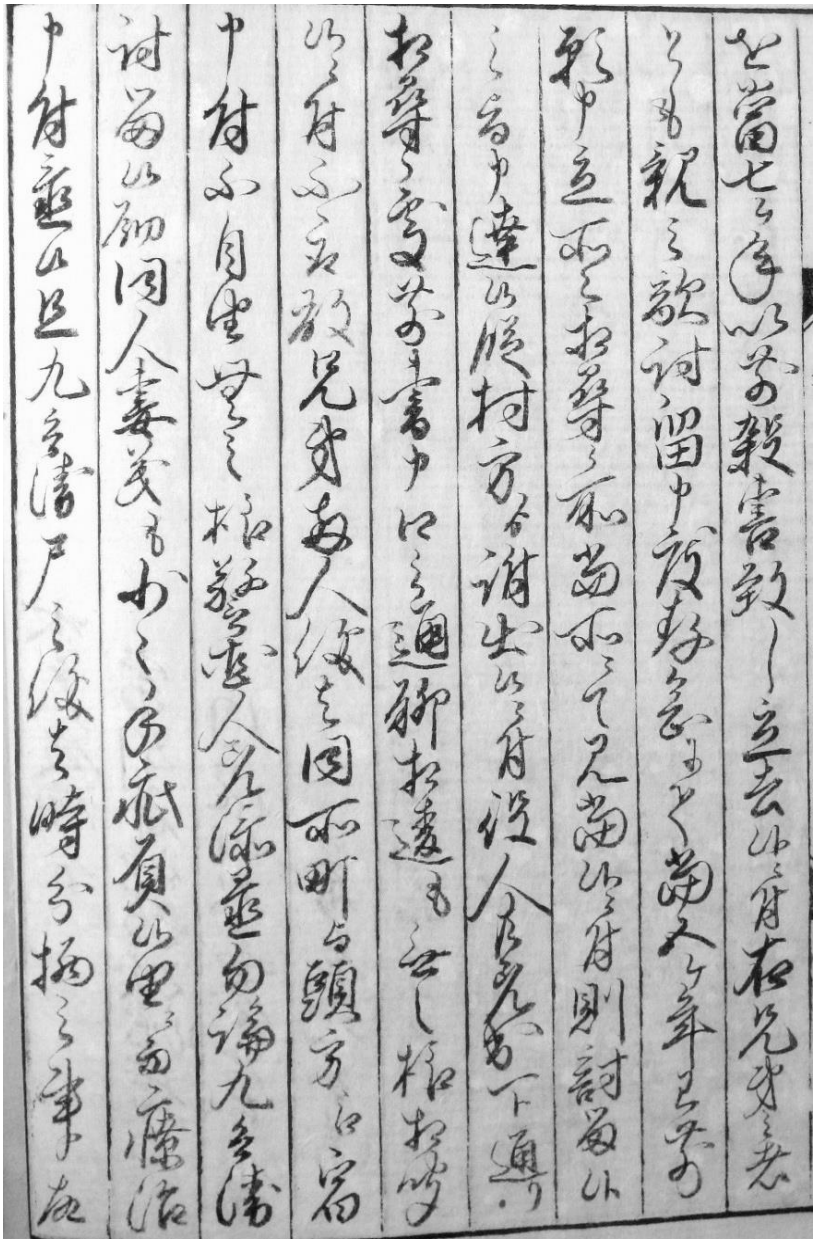
水戸殿御城付より問合書面の写

水戸殿領分
常陸国那珂郡
同郡横町大墨屋吉右衛門
弟長九郎儀

右九郎儀ハ中者共書之通所借宅居ニ而影
武輕お勝ハ浅田孫次郎ニ嫁ス浅田ハ江戸
去月廿七日ニ九郎宅ニ而武輕ニ歌ヲ詠ス
九郎儀ハ浅田村ニ居方ニ右女人ニ而武輕
浅田実ニ成敗ヲ勧ム中孫次郎ニ嫁ス
ハ

水戸殿領分
常州鹿嶋郡磯濱村
内祝町大黒屋庄吉店借
萬屋　九兵衛

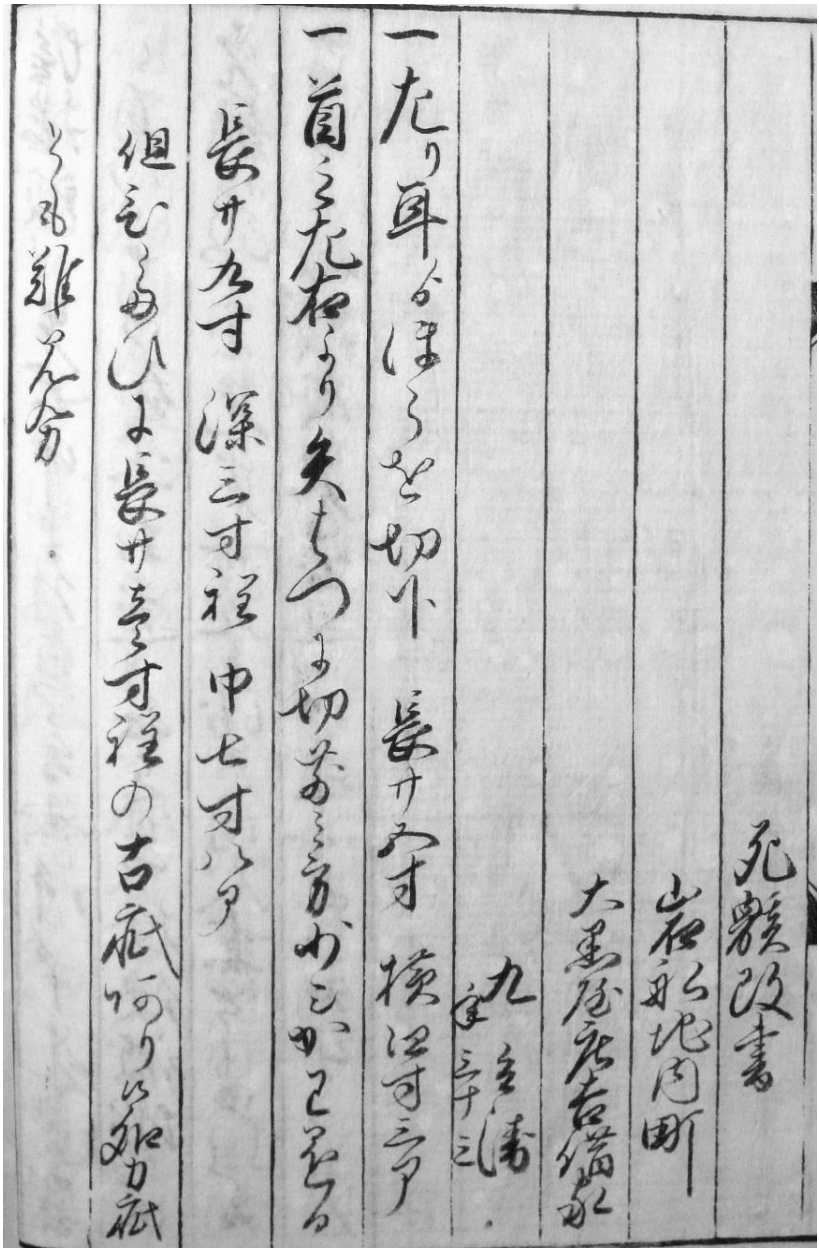
右九兵衛と申者前書の通　借宅居候処　其御家来
足軽相勤候　浅田鉄蔵弟浅田門次郎とは両人
去月二十七日夜　九兵衛宅江罷越親の敵の由　相名乗
九兵衛を討留　同村庄屋方江右両人罷越　右九兵衛
儀は実名成瀬万助と申　鉄蔵等親只助と申者



を当七ヶ年以前殺害致し立去候ニ付　右兄弟の者
とも親の敵討留申度存念にて　当五ケ年以前
願申立所々相尋候所　当所ニて見当候ニ付則討留候
の旨申達候段　村方より訴出候ニ付　役人共差出一ト通リ
相尋候処　前書申上通聊相違も無之様相聞
候ニ付　不取散兄弟両人儀は同所町組頭方江宿
申付　不自由無之様警固人差添置　勿論九兵衛
討留候砌　同人妻義も少々手疵負候由ニて療治
申付置候　且九兵衛屍の儀は時分柄の事故

塩詰致し先土中申付置候旨　国許より申来り候　前書
の通弥其御家来ニ相違も無之候ハヾ検使彼地江御
差越御改の上　兄弟並九兵衛屍同人妻をも御引取
有之候様致度候　尤公辺江御達の上　御取計ニ相成
候儀ニ候ハヾ水戸殿よりも被申達候て　可有御座候否
御申越御座候様致度　此段及御掛合御請役人共申候
但シ御家来検使御差越候ハヾ　右役名並人数出立
日限等被申越候様致度候

水戸殿飛脚の者覚書写



死骸改書

山田新地問屋

大黒屋長吉倅

九郎兵衛

一九ヶ所耳かほうとを切下　長サ六寸　横巾弐寸

一首ヶ所右より矢ヶ所切ヶ所ヶ所かしかとを

長サ九寸　深三寸程　中七寸ヶ所

但ヶ所ヶ所ヶ長サ三寸程の古疵ヶ所ヶ所

死骸改書

岩船地内町

大黒屋庄吉借家

九　兵　衛
年三十三

一　左り耳よりほゝを切下　長サ五寸　横四寸三分

一　首の左右より矢はつに切前の方少シかわ懸る

長サ九寸　深三寸程　巾七寸八分

但ひたひに長サ一寸程の古疵あり候処刀疵

とも難見分

一右之肩先より脊・長サ一寸二ア深サ二寸巾二寸四ア

一九之疵先より二之疵迄切下　長サ二寸二ア深サ二寸

巾四寸

一右之二疵　深サ一寸巾一寸

一九の大指切落し脊より九の疵迄　長サ九寸

三ア深サ二寸巾二寸二ア

一九のあばら　長サ八寸四ア深サ八ア程巾二寸四ア

一九の足元ぶくらぎ　長サ五寸一ア深サ一寸巾一寸二ア

都合九ヶ所

一　右の肩先より背・長サ一寸六分深サ二寸巾二寸五分

一　左の腕先より二のうて迄切下　長サ二寸二分深サ三寸巾四寸

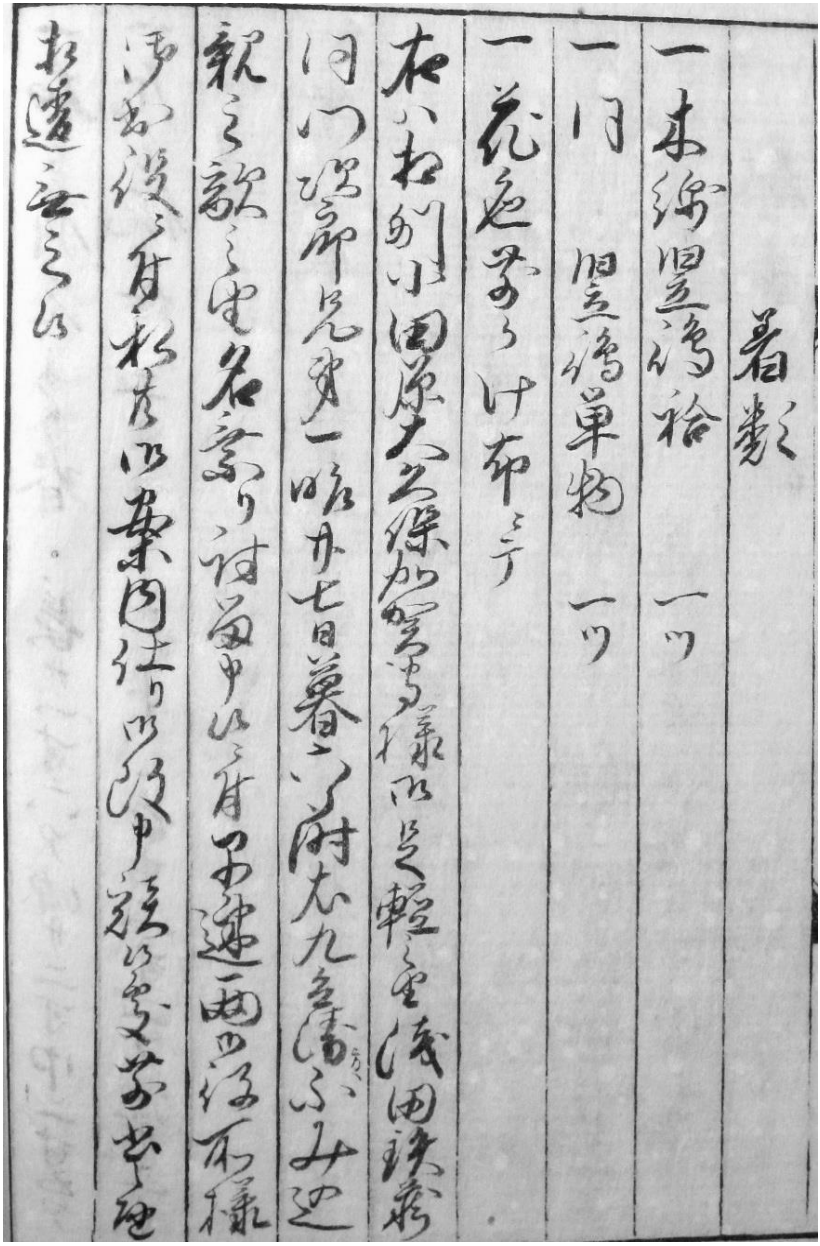
一　右の二腕　深サ一寸　巾一寸

一　左の大指切落し背より左の脇へ懸ヶ　長サ九寸三分深サ二寸　巾　二寸三分

一　左のあばら　長サ八寸四分深サ八分程巾二寸五分

一　左の足ひざした　長さ四寸一分深サ一寸巾一寸六分

都合九ヶ所



着類

一　木綿竪嶋袷　一ツ

一　同　竪嶋単物　一ツ

一　花色前かけ布ニテ

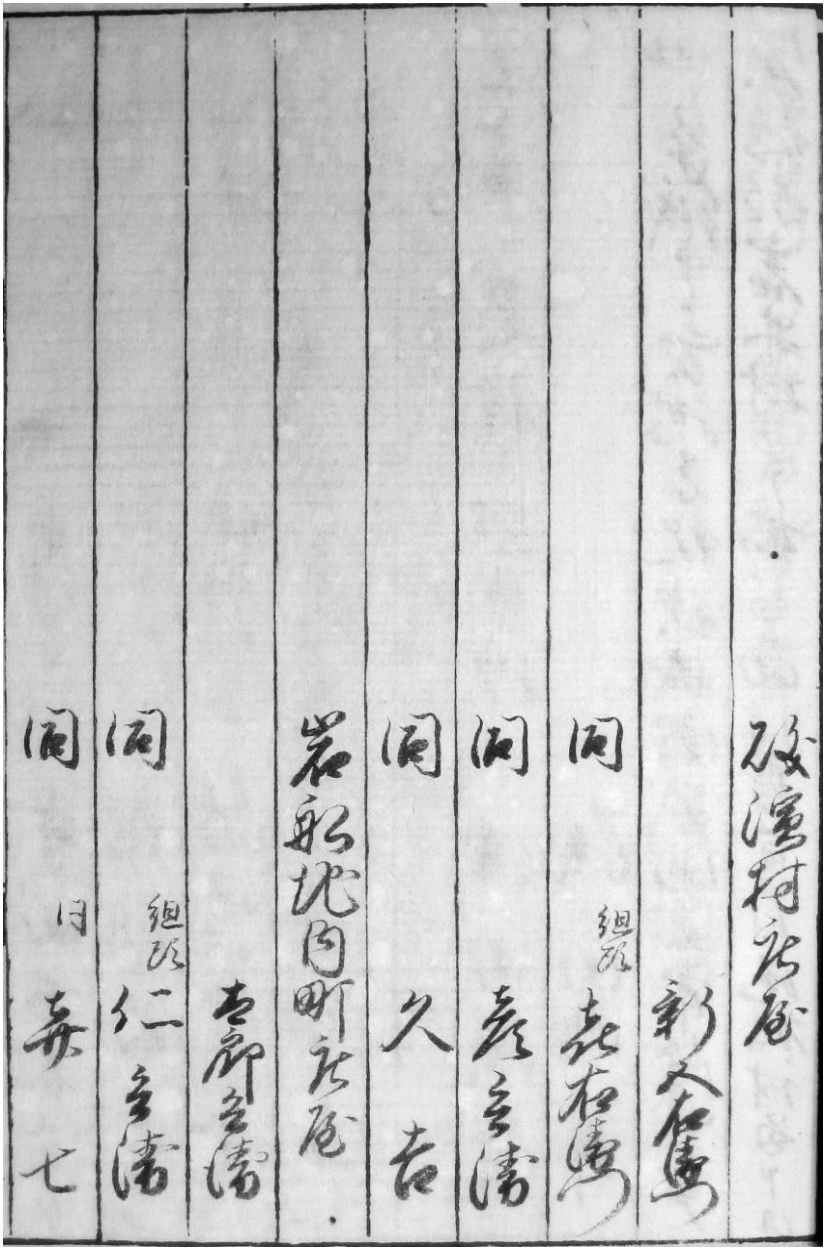
右ハ相州小田原大久保加賀守様御足軽の由　浅田鉄蔵

同門次郎兄弟一昨二十七日暮六ツ時　右九兵衛方へふみ込

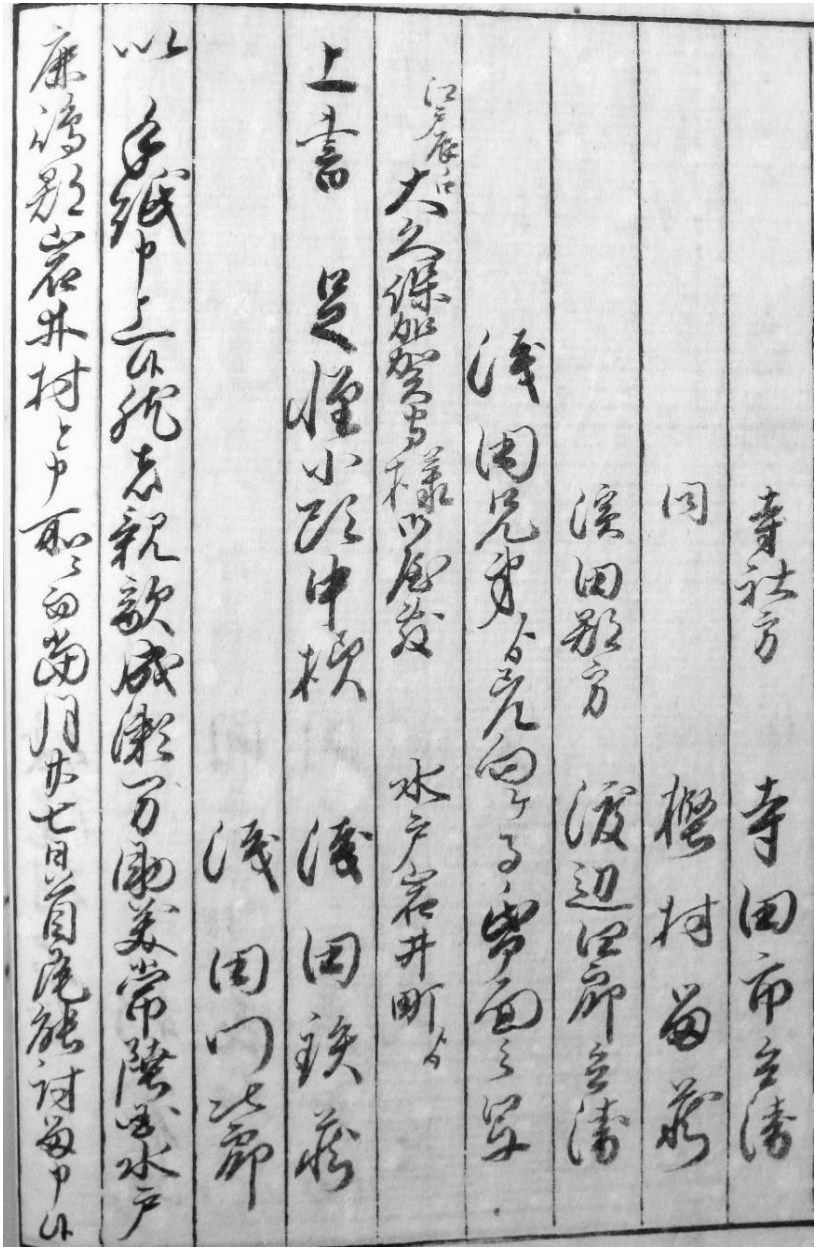
親の敵の由名乗り討留申候ニ付　早速両御役所様

御出役ニ付私共御案内仕り御改申談候処　前書の通

相違無之候


同
同
同
同
同
同
同
組頭
組頭
同
日

磯濱村庄屋
　新五右衛門
同　組頭　喜右衛門
同　彦兵衛
同　久吉
岩船地内町庄屋
　太郎兵衛
同　組頭　仁兵衛
同　同　喜七



寺社方　寺田市左衛
同　櫛村茂兵
浜田藩方　渡辺弥市左衛
浅田兄弟分元和元年
大久保加賀守様御屋敷　水戸岩井所分
上書　是程小弦中様　浅田鉄兵
浅田門弟
以上
紙中上ル　元和元年九月朔日　水戸
康治郎　岩井村ヨリ　和田茂兵衛討留ル

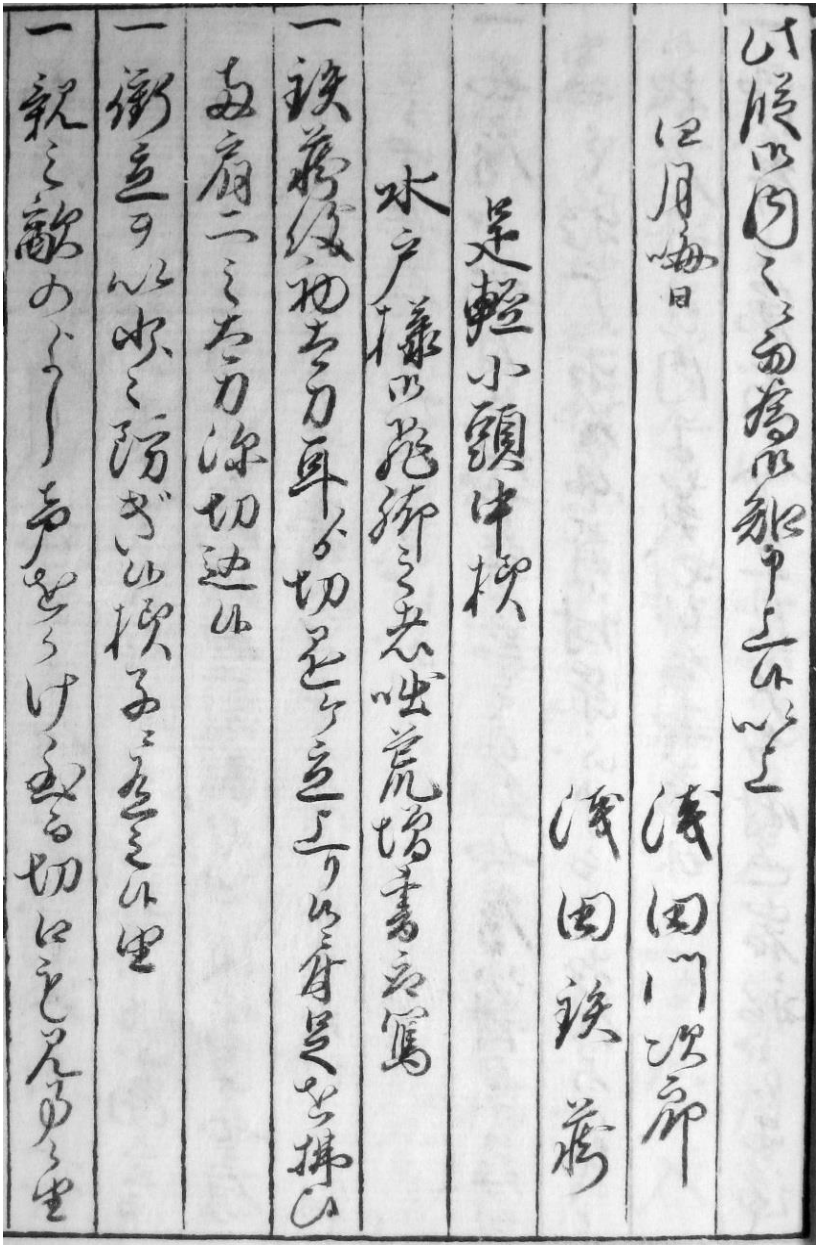
寺社方　寺田市兵衛
同　樫村留蔵
浜田郡方　渡辺四郎兵衛

浅田兄弟より差向ヶる紙面の写

江戸辰ノ口
大久保加賀守様御屋敷　水戸岩井町より

上書　足軽小頭中様　浅田鉄蔵
浅田門次郎

以手紙申上候　然は親敵成瀬万助義　常陸国水戸
鹿嶋郡岩井村と申所ニて　当月二十七日首尾能討留申候



此段御内々ニて為御知申上候以上

四月晦日　　浅田門次郎

浅田鉄蔵

足軽小頭中様

水戸様御飛脚の者咄荒増書取写

一　鉄蔵儀初太刀耳より切懸ヶ立上り候ニ付　足を払ひ
両肩二の太刀深切込候

一　衝立ヲ以少々防ぎ候様子ニ有之候由

一　親の敵のよし声をかけ至て切口も見事候由

一如房ニ疵様ニ二ヶ所ニ横二寸深サ八分一ヶ所
横四寸程深サ八分程一ヶ所ニ疵ニ而ハ無之
疵ニ而右疵ニ付命絶ス刀ニ而切ル如房
何ニ而ハストヤ而実ニ刀ニ而命ニ而切ル絶
ニ而如房ハ其内ニ申げもしい

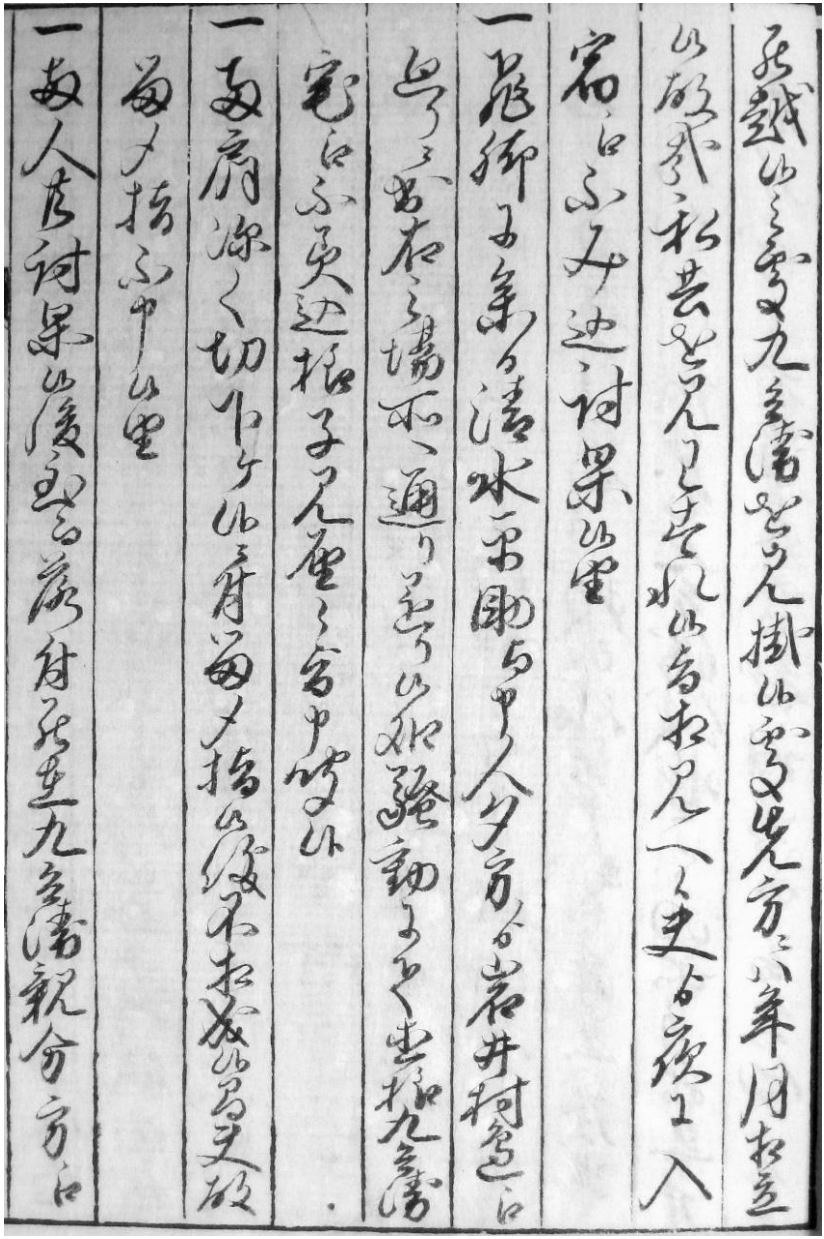
一如房ニ疵有ル絶ル等ニ付如房ハ討果ル等
ニ而ハ無之ニ付討果ル申ニ付如房ハ
找ニんじい内ニ弟ニ申ニ付

一沙尊ニ命ル人ニ而ハ外ニ而ハ無之ニ付

一　女房の疵腰ニ二ケ所有之　横二寸深サ五分一ヶ所ハ
横四寸程深サ五分程一ヶ所有之　骨ニも不当至て
浅疵の由　右疵は門次郎儀も刀を抜候処　女房
何を致スト申て突候付　其節ニても取切候儀
の由　女房ハ其内にげ出し候

一　女房江疵付候儀　御尋有之候処　女房ハ討果候存念
無之邪魔ニ相成候ニ付　討果不申ては相成間敷哉と
そんじ候内にけ出候旨相答候

一　御尋の節両人申立候ハタ七ツ時過岩船江参詣

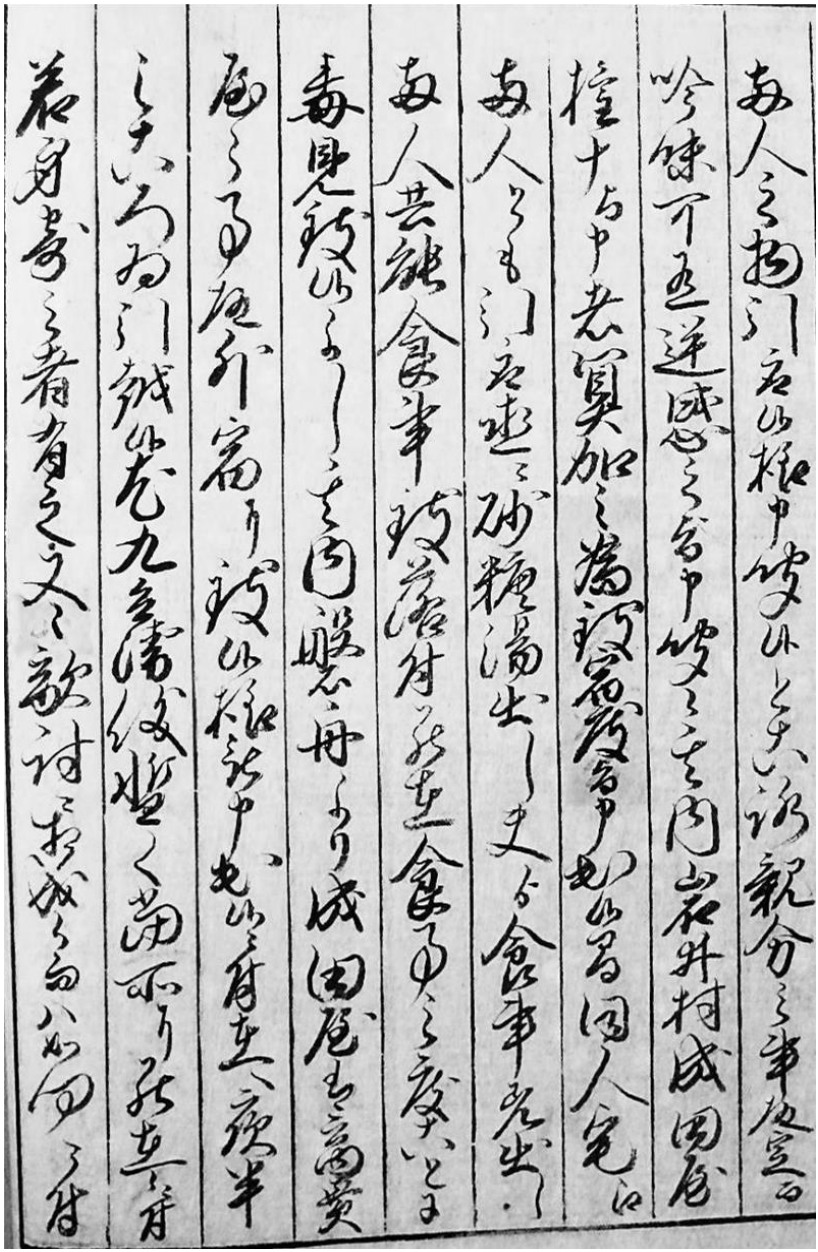


罷越候の処　九兵衛を見掛候処　先方ニハ年月相立
候故哉　私共を見わすれ候旨相見へ候　夫より夜に入
宿江ふみ込討果候由

一　飛脚に参る清水平助と申人　夕方より岩井村辺江
廻りニ出右の場所へ通り懸り候処　騒動にて直様九兵衛
宅江ふみ込様子　見届候旨申聞候

一　両肩深く切下ヶ候ニ付　留メ指候儀不相成候間　夫故
留メ指不申候由

一　両人共討果候後至て落付罷在九兵衛親分方江



両人の物引取候様　申聞候ところ親分の事故定て
吟味可有迷惑の旨申聞候　其内岩井村成田屋
権十と申者冥加の為致宿度旨　申出候間同人宅江
両人とも引取直ニ砂糖湯出し夫より食事差出し
両人共能食事致落付罷在　食事の度ことに
毒見致候よし　其内磐舟より成田屋は商売
屋の事故外宿に致候様　被申出候ニ付　在へ夜半
のころ為引越候　尤九兵衛儀暫く当所に罷在候ニ付
若身寄の者有之　又々敵討ニ相成候てハ如何ニ付

人丈大勢指出警固致候処

一平助儀九月廿日之夜ニ入り浅田家之内ニ入

納め死骸を付て引取之由ニ而浅田家附ニ指扶

有之候入手ニ有之候ハヽ

一両人ハ何方ニ隠れ居候哉不知候ハヽ

候人芸之儀ニ付ハ

候ハヽて

一日ニ二度食物ニ毒味候ハヽ

人夫大勢指出警固致候由

一　平助儀九兵衛宅江参り候節は両人共最早刀を納め　死骸に付そひ罷在り候　至て落付候挨拶有之恐入候事と有之段申来候

一　両人とも度々飛脚の儀相願候得共　不相成候とて役人共より差留只今指（持）参の手紙は両人申旨役所にて認　役所より指出候ニ付持参の由　申聞候

一　日々の食事事毒見役申付有之毒味の上為差出候よし

一毎人方ニ而ハ家内大ニ困窮仕城下ニ居
候物騒ニ成候ハ、一人の老も書紙ニ而ハ
なりかたく
一女房ニ置ハ仕合ニ成ニ置ハ
一旦ハ嫁ニ縁切ハ中ニ而ハ
出ス方ハ九郎ニ居ハ
浅田兄弟敵討始末

一　両人共至て落付大ニ評判宜敷御城下より
見物夥敷罷越候何れも勇気落付をかんしん
いたし候

一　女房の里ハ御領国内二里程障て候由に承り候
一旦外へ嫁し縁切不申岩船へ欠込縁を切
夫より九兵衛つまと相成候由相咄候以上

浅田両士敵討始終畢